



私の子ども

時代(2)



多摩の自然と

人間関係の中で
忘れ得ぬこと

森田 宗一

私は多摩川の上流に近い山村で生まれ育ちました。生まれつき虚弱児で、無口で内気な性^{たち}だった私も、多摩の清流での友達と一緒に水泳や魚釣り、大菩薩峠に連なる多摩の山々を走りまわって遊ぶことで、だんだん丈夫になりました。その自然の中の遊びや読書や様々な人間関係は、血肉となって忘れ難く、八十歳に近い今日になっても、心や体の中に生きております。まことに「兔追ひしかの山 小ぶな釣りしかの川 夢は今もめぐりて忘れがたきふるさと」とよく歌ったあの小学唱歌の通りです。奥多摩の山河は永遠の心のふるさとです。



ある寒い冬の朝のことです。こんな忘れ難い、心に焼きついた思い出があります。多摩川に近い家からほど遠からぬ井戸端でのことです。あたり一面に靄もがたちこめておりました。その靄の中に誰かが立って、東の方を向いて黙禱もくねいしているのです。「あ、お母さんだ」。もう朝の一仕事を終えたらしい母が、黙って祈りながらじっと立っているのです。

私は邪魔しないように、母の祈る後姿をしばらくじっと見つめておりました。あたりの空気はつめたく手はかじかむほどでした。しかし心は温かくふるえるようでした。あのいつも忙しい母が、誰も見ていないところで、あのような独りの祈りの時を持っている。それは私にとっておごそかな新しい母の発見でした。なにくれとなく家族のことをしてくれる真向きの母、手ぎわよく働く母の横顔、それは今までよく見てきました。しかし、この朝かいま見た母の後姿は、新鮮におごそかに私の心に刻まれました。

その後私は十三歳で独り上京し、昼は働き夜間中学に学び、十代の終わる時旧制第一高等学校に入りました。大学時代母は二か月ほど病んでこの世を去りました。私は看病のあいまに、あのことを聞いてみたいと思ったのです。

「ボクはあの時井戸端で祈っているお母さんの後姿を見ていた。そしてそれがその後の東京生活の間中いつも心の励みでした。お母さんは何に向かって何を祈っていたんですか。それがどうしても口に出ないのです。苦勞の多いこの世の生涯を終えて、第二の旅路にこうとする母は、当惑してこんなこと言うかも知れない。そう思うと口に出して聞けな



かったのです。

「わたしは気がつかなかった。ましてそれが宗一の心の力になろうなどとは思わなかった。信仰とか何とかあるわけでない。そうしてただただ。何に向かって何に祈るか、それはお前の問題だ。人に聞くことはあるまい。人それぞれの問題じゃ！」

野辺の送りをすませて私は母の気持ち^{えな}を忖度して、そう自分に言い聞かせ、母を当惑させないでよかったと己に言い聞かせました。しかしあの子どものかい^かい^かい^か見^みた^た母^はの後^ご姿^さ、その祈る後姿は、私の人生の宝となり絶えざる心の戒めとなったのです。

山や川をよくとびまわったと言いましたが、家の仕事の手伝いをしながら、無口で内向型の私は本をむさぼり読みました。立川文庫というその頃全国をふうびした講談本のほか、少年倶楽部。時には父や兄の本箱から、黒岩涙香の「あゝ無情」、浪六の「時代相」そして紅葉の「金色夜叉」、中里介山の「大菩薩峠」などこっそり読みました。かなりませた子どもだったようです。

虚弱なくせに甘いものが好きで、よく祖母に叱られました。あの大きな葬式まんじゅうを一人で丸ごとたべてみたいと憧れていました。その頃お葬式があると、だ円形のとても大きいおまんじゅうが出たのです。いただいてきて誰も一人でたべるわけにいかない。お孫様へあげるときなさい、お預けですよ」と母か祖母が必ず言うのです。はい」と



言って仏壇へあげながら想像力を働かせるのです。

「あれはいつみんなでたべるのかな。その時切っていたくんなら、大きいところを取ろう。横わりならどこが得かな、たて切りだったらどこがいいか」。目のこざんで見当をつけておく。ところがいざその時になって母が家族の前で切ってくれるのは、実に平等に切つてあるのです。私はねらっていた大きそうに見える端の方をとる。妹は残りの真ん中の部分をとる。しかし私のとつた部分は、皮が多くアンコはちよびり。妹の分は皮が薄くアンコがつままっている。『なあーんだ同じじゃないか。そうだ、いまに大きくなつたら自分で働いてああいう大きなまんじゅう十個ぐらい買い、だれに遠慮することもなく心ゆくまでたべてみよう。それまでがまんしよう。お預けだ』。そう悟るのです。

私は、その後上京し最初は文部省給仕として働き、一か月たつて初めて日給月給で十三円五十銭貰つた時、早速まんじゅう屋へ行きあの大きな葬式まんじゅうそっくりのを四個ほど買つてきて、一人でたべてみました。『なつかしい憧れの葬式まんじゅうよわが腹に入つて成仏せい』。そう言つてたべてみたが、二個ぐらいでげんなり。『一人でたべたんではうまくもない。思えば、郷里にいた幼い頃あんなに葬式まんじゅうがおいしかったのは、一日か二日のお預けのあと、妹を初めみんなでわけてたべたからこそおいしかったのだ』。そうしみじみ思つたのでした。

人間の欲望は無尽です。年齢とともに、色々の欲望が生じます。人間は自然のおきて、だ



けに従えない不条理な生きものです。自分の意思、理性の力で欲望を抑制しなければならぬ。それゆえ“お預けの味”“お預けの訓練”が大切なのです。幼い時は何と云っても、たべ物です。時には欲しくても我慢する。人とわけ合う。人にゆずる。夢を将来にすぎなく。そういうことが大切なことを私は幼少時の体験の中で、教えられました。また祖母はよくこんなことを私たち孫どもにこんなこと言いました。

「弘法様は、道の馬の糞の上に落ちて一粒の米つぶでも“もったいない”とおしだされたという。“もったいない”という心を忘れてはいけません。そうでないとバチが当たる……」

口癖のようにこんこんと孫たちを戒める祖母の教えは、お預けの体験とともに、その後の心に深く刻みこまれ、人生行路の力になったと思います。思えば今の子どもたちには、そういう体験や訓えがない。それが不幸のもとになるものなのです。

多摩の山河の中で、私の子ども時代の忘れ得ぬ「母のうしろ姿」と「お預けの味」のことを語りましたが、もう一つ記しておかねばならないことは、ナイスさんの思い出です。「ナイス」というのは、子どもたちの遊びにとって魅力ある兄貴分だった魚屋の小僧さんの仇名です。ナイス、ナイスと言いつつながら子どもたちのよいリーダーであり、村人からも慕われた「ナイス」は、その頃のわたしたち子どもたちの世界を明るくしてくれたただけでな



く、その後もずっと忘れられない思い出の人でした。

その頃の子どもは、よく働かされましたが、遊びは子どもにとって大切なものです。友達とどうつき合いどう遊ぶかが、重大な子どもの生活です。子どもの集団というものは、一つの世もそうですが、自然のままにしておく、うまくゆかないことがあります。私どもの仲間もそうです。ボスが出来たり、仲間からぬけ出すものが出たり……。ところがある時からがぜんみんなが仲良しになり、一人もはみ出す者もいばる者もないよいグループになる転機があり、それが何年もなく続きました。

多摩川をはさんだ向かいの村の魚屋の小僧さんが、私たちの住む地域に魚売りにやってくるようになってからです。その小僧さん、子どもが好きで好きでたまらないユーモアの人柄の青年でした。子どもたちが大勢で遊んでいるところへやって来て仲間になってくれました。いつも板台の中には、野球のボールとグラブがしのばせてあります。下手な野球をしている子どもたちの仲間に入り双方のキャッチャー（捕手）をしてくれました。へんなボールを投げても「ナイス」と言う。うまい球を投げると「ナイス、ナイス」とおまけがつく。すべりこんでアウトになっても「ナイス」と一つは言い、ころんでも「ころびっぷりナイス」と言います。うまくセーフになると「ナイス、ナイス、ナイス」とおまけがつくのです。野球にあきると講談本を読み、子どもたちにも一人一人読ませてくれるのです。ここでも「ナイス、ナイス」の連発。みんなナイス青年と遊ぶのが何より嬉しく、正



太郎という本名は忘れて、ナイスさんと呼んで親しんでいたのです。それで子どもたちは野球や本読みが好きになり上手になったのです。何よりもみんな仲良しになりました。こういう数年続いたナイスさんとの思い出は、ずっと心に残り、人生の励ましになりました。ナイスは戦後惜しくも若死にしましたが、あの頃の思い出は歳月を経ても私どもの心から消えることはありません。美しい多摩の流れのほとりに今もわれらのナイスは眠っておりません。その流れの尽きない限り、ナイスは生きている！ ほんとうにナイスは生きているのです。

大正のデモクラシー、大正のロマンの時代といわれた時期。それが私の子ども時代でありました。短かかったけれど、古きよき時代だったのかも知れません。豊かではない山村でしたが、多摩の自然に抱かれ、素朴な心ある人間関係に恵まれたことを、今でも感謝しております。思い出せばきりがなほどの事どもの中の二、三を、以上に記しました。子ども時代は、ほんとに人間一生の基礎ですね。

(元・家庭裁判所判事)